

ペン俳句会 句会報(三百六十号)

令和六年九月五日(木)

兼題『晩夏光』、席題『頭』

句会を、今年八月と同じ場所で開催。出席九名。

投句十名(ゆふきさん欠席)

中村 晃也

擦り切れしデニムの裾や晩夏光

晩夏光ほこりまみれの虫眼鏡

ヨットの帆波頭を超えて遠ざかる

疲れ鶴の臉の奥の宇宙かな

虫の声壊れしままの水車小屋

語り継ぐ平家の里や蝉時雨

森田 元斐

居続ける炎暑に一矢宵の鐘

炎天へ女太鼓の撥さばき

嵐待つ鏡の川面蝉しぐれ

満を持し赤々と燃ゆ百日紅

故郷を離れて遠き墓洗ふ

組み直す足の倦怠海暑かな

松田 一文字

秋冷や美術の部屋の頭蓋骨

かもめ舞ふ宗谷の海や晩夏光

引き潮に海星の残る晩夏かな

秋めくや瀬切る川音かぜの音

虫のむくろ真黒に覆ひ蟻の群れ

鮎釣の長竿ならぶ川瀬かな

宮原 凧

散骨の友を送りて夏逝けり

月今宵グラスに注ぐ白ワイン

秋夕焼け本屋を覗く帰り道

ひとり生く余白また良き晩夏光

秋日和笠智衆に会ひに行く

白萩や無縁仏の土饅頭

大津 そうかい

板前のつま刻む音秋立てり

露草や昨夜の星屑吾が庭に

柿挽ぐや頭上をあれはハワイ便

菜園の葉擦れかそけし晩夏光

秋暑し負ひて抱きて母戦車

秋風や駈けるハイカー待てるバス

安藤 晃二

むらさきの泰然と揺れ百日紅

大雨や紅の零るる百日紅

大鳥居玉砂利踏めば晩夏光

モノレール頭上行き交ひ秋暑し

白雲の渦巻きてをり晩夏光

秋空や頭上あの日の大編隊

浜口 金魚姫

待つ人を待たぬふりして雨月夜

子を抱いて行きつ戻りつ盆踊り

現世はこのままでいい蓮の花

美文字習ふ筆先の跳ね晩夏光

宇宙との真夜の交信螻蛄鳴く

ばば抜きに頭寄せあひ蝉時雨

志村 良知

熱八度妹よりの梨甘し

病ひ癒ゆジムへ行く道晩夏光

駅頭の人人人の驟雨かな

冷やそうめん藍の切子を取り出だし

朝霧の川面に湧きて山は晴

熊除けの鈴の交錯葛の道

長尾 進一郎

宿題の手のつかぬまま晩夏光

合唱の練習の窓秋高し

台風の去りし大川瀬の濁り

おらが夜と皆で鳴き出す庭の虫

赤とんぼ我の頭の上を舞ふ

ブラムスの曲に目覚むる秋の朝

西川 知世

頭の上に揺るる緋重し夾竹桃

ステンドグラス床に零るる晩夏光

オルガンや秋暑を隔つ色硝子
秋蝶の猛るや雲の疾く高く
逢瀬めく七夕笹に人待てば
クルス慕黄泉に秋暑のあらざらむ

次回は令和六年十月三日（木）。

兼題は季語「翳雲」（中村晃也さん出題）、席題は西川知世さん出題の「長」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

兼題「翳雲」は 秋空に小さな白雲の塊や濃淡がほとんどないような雲の白片が集まっているの言う。小さなイワシがむれているような様の雲を翳雲という。まだ体感では夏の暑さを引きずっているが、いかにも空から秋が来ると実感する季語。魚の鱗に似ているので鱗雲ともいう。学名は巻積雲で、形状が違ったものでは鯖雲があり別の項にたてられている。文化五年の『改正月令博物笥』季寄に入っているそう。この雲が高空に見えたと、入道雲の湧いていた空がしみじみと秋の到来を感じさせる頃となる。この雲がでると降雨の前兆とされ、翳の大漁があるとも言われる。私が頼りにする大歳時記に、山本健吉が「今日の俳人にはここに愛用される季題である」と書き添えている。

翳雲日和いよく定まりぬ

高浜虚子

いわし雲大いなる瀬をさかのぼる

飯田蛇笏

翳雲こゝろの波の未消えて
大阪やけぶりの上にいわし雲
翳雲個々一切事地上にあり
翳雲ひとに告ぐべきことならず
妻がゐて子がゐて孤独いわし雲
翳雲日かげは水の音迅く
翳雲はたらく人を地に撒ける
あやす子を高く抱き上げ翳雲
翳雲線路の下を水くぐる
翳雲動くよ塔を見てあれば
自画像は描かぬと決めて翳雲
アンモナイトの億年の渦翳雲

水原秋櫻子
阿波野青畝
中村草田男
加藤楸邨
安住 敦
飯田龍太
福永耕二
志村康子
沢木欣一
山口波津女
畠田 天
銀林晴生